
恋する時間

水上和樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する時間

【Zコード】

N72620

【作者名】

水上和樹

【あらすじ】
ショートストーリー
3分間SSSという「3分間」というテーマを元に書いた短編小説
です。

「これでタイム計つといってくれよ」

「うん、大丈夫」

陸上部の部員である彼から、陸上部のマネージャーである私はストップウォッチを受け取った。

とはいえた活ではなく、今日は日曜日で休みなのだが、たまたま駅伝にむけての自主練を、起伏のある住宅地でしていた彼に出会い、少し話しをするうちに区間タイムを計ることになってしまった。市街地へ買物に行くつもりだった私は私服姿で、今はもう他界した祖母から誕生日に買つて貰つたブランド物のバッグを持っている。その私の姿とストップウォッチは明らかにミスマッチだ。

彼はさすがにユニフォーム姿ではないが、Tシャツに短パンと身軽な服装だ。

二人を客観的に見れば、これもまたミスマッチだろ。もちろん私と彼がどう周りから見えようが、私には全く興味のないことではあるが…。

「それじゃ、用意して」

私はいくらかの気だるさを匂わせつつヨーヨーダンの準備をする。數十分程度の我慢。彼が帰つてくればすぐに買物へ行こう。彼がウォーミングアップを止めてスタートラインに立つ。

「ヨーイ」

「イー——ヤツホ——イ——イ——！」

突然の奇声と共に私は突き飛ばされた。

そして腕に強烈な力がかかり、思わずストップウォッチを落としてしまった。

「おいつ！」

彼が駆け出した。

顔を上げると一人乗りのスクーターが私のバッグを持って逃げている。それを彼は追いかけたのだ。

「止めて！危ないよ！」

私は大声で叫んだが、スクーターの音にかき消されて届いていない。

00-05" 12

住宅街で、かつ二人乗りなので、直線とはいえスクーターはいまいちスピードに乗りきれていない。しかしさすがに人の足ではなかなか追い付けない。じりじりと差がついていく。

「もういいから！」

私は座り込んだまま口元に手を当て思いきり叫ぶがもう届かない距離まで走つていってしまった。

00-42" 71

もし奪い返したとしても、相手は一人なのだ。一人がかりで襲われれば彼が危険だ。

立ち上がるうとしたが、足首に激痛が走り、また座り込んでしまつた。先ほど倒されたときに、足首を捻つてしまつたらしい。

「痛たた…」

何度も立ち上がるうと試してみたが、力が入らない。

携帯電話で警察を呼ぼうにもそろばバッグの中。私にできる」とはここで座つて待つだけだった。

彼とは同級生だが、部活が一緒になつて初めて会話をするようになった。でも一言一言陸上部に関わる話をするぐらいで、私は彼のことを探らぬ。彼もきっと私のことを何も知らない。

それなのにバイクを必死に追いかけて、正義漢ぶつて…今どき流行らない、そんな男。

01・51" 30

「でも…」

「そういえば、大好きだった祖母が言つていた。
警察官だった祖父は、愚直で、不器用で、そして絵に描いたような正義漢だった。そんな祖父がたまらなく好きだったと語つてくれた。

その時だけは、まるで子供のような無邪気な笑顔で、その顔を見て、当時は祖母のように歳をとつていきたいなと思ったものだ。
私の脳裏に祖母の顔と最後に贈られたバッグが重なる。

「お願い…」

もういいからと叫んだが、本心は真逆だった。

「取り返して…」

あのバッグだけは買い替えることのできない大切な物。

02・22" 51

足元にストップウォッチが転がつていてことに気付いた。
何となく拾つておかないといと、とそれを懸命に手を伸ばして拾う。

「よい…しょ」

「おい」

突然後ろから声をかけられ驚いた。そして恐る恐る振り向く。
そこには彼の顔。一生懸命走ったのだろう、顔が真っ赤になつて

いる。

「ほら」

手にはバッグ。私の、祖母から贈られたバッグ。

「あ…ありがとう」

喜びと共に戸惑いのような感情が混じり、中途半端なお礼になってしまった。彼に聞いた。

「な、なんで？」

「何のこと？」と彼は首を傾げる。

「なんで取り返してくれたの？危ないし、私とそんなに…仲良いわけじゃないし」

最後の言葉は言いにくく、少し言い淀んでしまう。

彼はあっけらかんと言った。

「だつて、それお前の大事な物だろ？」

「えつ？」

「近所だからたまに見かけてたけど、そのバッグを持ち歩いてる時は特別何か楽しそうに見えたから」

その言葉にドキッと心臓が跳ね上がり、思わずストップウォッチを落としてしまう。

力チツ

自分の顔がカーッと赤くなるのを感じた。もちろん、彼が真っ赤なことは理由が違う。

私は彼のことを何も知らないけど、彼は私のことを意外と知っているのかもしれない。

ストップウォッチを拾い、彼の手を借りて立ち上がる。

「本当にありがとう」

今度は心から喜んでそう言つた。私は祖母のよろこび笑えているかな？

チラリとストップウォッチを見る。

03-00"00

それは私が彼に恋をした時間。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7262o/>

恋する時間

2010年11月5日17時39分発行